

# 2014 2 福音と世界

特集＝神とはだれか

9

- 中学生・高校生たちとともに神を想う……富田正樹 12
- イメージを超えて拓かれるもの……坂田奈々絵 18
- 二重に死せる神と現代日本に生ける神……加藤喜之 24
- 逆説の中でしか出会えない方……柳沢美登里 30
- 私が出会った「義なる神」……遠藤比呂通 34

- ▶読者寄稿 キリスト教平和主義とはなにか……片野淳彦 8
- ▶追悼 マンデラというアイコン①……ジョン・W・デ・グルーチー 10
- ▶書評 『ヨブ記の全体像』……飯郷友康 38
- ▶WCC釜山総会で平和を叫ぶ①……ユン・ミヒャン 40
- ▶「葦の歌」によせて……渡辺信夫 42

新教出版社創立70年記念

- ▶70年の名著03 神を叫ぼう……今高義也 52
- ▶70年の名著04 天路歴程 正篇・続篇……原田博允 53

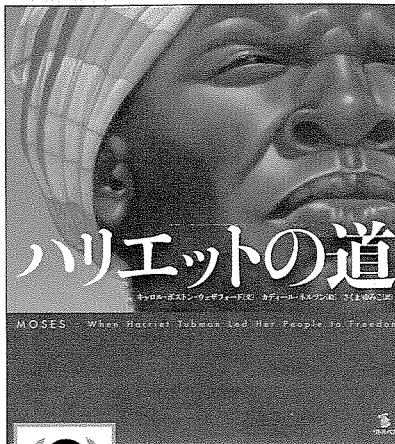
新連載

- ▶中国教会通信1 中国教会とは何か……松谷暉介 6

連載

- ▶みことは断想2 主は羊飼い……岩田雅一 2
- ▶自民党改憲草案を読む10 さよなら「平和憲法」①……横田耕一 4
- ▶ミヌル2……大城 実 48
- ▶カール・バルト『教会教義学』の世界2 「神の言葉」(前)……寺園喜基 54
- ▶市民K、教会を出る13 信頼を失った「言葉の宗教」……金鎮虎 56
- ▶大正・昭和キリスト教史の周辺8 津軽のプロテスタントたち……太田愛人 62
- ▶旅する教会—再洗礼派と宗教改革11 メディアのなかの再洗礼派……榎 香央里 64
- ▶神学の履歴書63 コレクティブ・インテリジェンス(集合知)……佐藤 優 68
- ▶詩篇の思想と信仰109 ヤハウェの慈愛に感謝せよ……月本昭男 72
- ▶私のごすべてのくろにくる26 1995 満月の夕……沢 知恵 79
- ▶表紙画について……林 美蘭 80

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457  
 e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ <http://bp.uccj.jp> 〔価格は税別〕



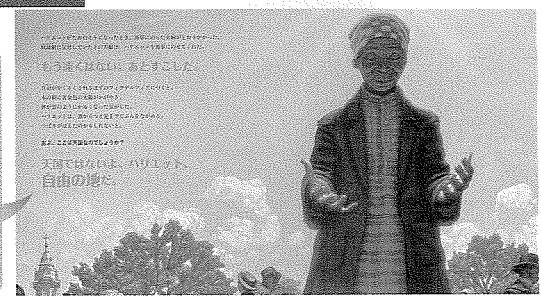
## ハリエットの道

キャロル・ボストン・ウェザフォード 文  
カディール・ネルソン 絵  
さくま ゆみこ 訳

新刊絵本

**自らの手で自由を得た黒人女性の魂の物語**  
自身も黒人奴隸として抑圧されつつも、眞の自由を求め、神を信頼して、多くの黒人奴隸を救い出したハリエット・タブマン。「女モーセ」と呼ばれた彼女の半生を、魅力あふれる絵で描き出す。

◆298mm×273mm 上製・48頁・本体1,800円+税



## 並木浩一 連続講演会のご案内

### 第2回 「批評としての旧約学」

日 時 2014年3月15日(土) 13時30分～15時30分

会 場 教文館9階 ウェンライトホール

参加費 500円

申込み 教文館キリスト教書部へFAX、Eメールのいずれかでお申込下さい。  
 TEL 03-3561-8448 FAX 03-3563-1288 E-Mail [xbooks@kyobunkwan.co.jp](mailto:xbooks@kyobunkwan.co.jp)

●主催／教文館キリスト教書部、日本キリスト教団出版局 ●後援／日本キリスト教文化協会



講演会開催予定 ▶第3回 2014年6月7日(土) ※会場が異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

加藤喜之

# 二重に死せる神と 現代日本に生ける神

はじめに

「神とはだれか」という問いは、現代日本人にとって身近なものではない。ではなぜ身近なものではないのだろうか。様々な理由が考えられるが、そのひとつとして、科学の発展がある。日本においても「神」や「神々」そして「仏」といった存在は、二十世紀前半まではもつと身近なものであった。人間を超えた神々の力を多くの人がおそれ、様々な祭事が社会の中で重要な役割を担っていたであろう。しかし科学や技術の発展とともに、あらゆる現象は科学的に説明されるよう

について考えてみたい。最後に、現代という文脈の中で、キリスト教の神を語る可能性について、十字架上で神の死を通して考えていく。

## 十七世紀における神をめぐる問い合わせ

現代において、科学的思考は神々の存在を遠いものにするとされているが、十七世紀の科学革命に携わった初期近代の思想家たちは、神をめぐる論争を夢中で繰り広げていた。ガリレオ、デカルト、ニュートンと呼ばれる近代科学の創始者たちは、神にこだわり続けた。なぜだろうか。この問いに答えるには、彼らが乗り越えようとした中世的な神の概念が理解されなくてはならない。

中世西欧における神概念には、一定のコンセンサスがあつた。それは人間の知性には把握されることなく、宇宙を遥かに超えた存在としての神というものである。神は宇宙のすべてをご自身の知恵によつて造られたが、その知恵は有限であり深い人間には開かれていないなかつた。もちろん人間は、神や宇宙に関する多少の知識を得ることはできたが、それは罪や有限性のために確実なものではない。確実な知識を得るには、神がその知恵を人間に伝えるという「啓示」が必要であつた。そして唯一その啓示を保持していたのが、教会なのである。

中世の教会は神の啓示としての聖書を解釈する権利を一手におさめており、神の知識だけではなく、自然哲学、政治、経済といった分野の確実な知識も、究極的には教会の聖書解釈にしたがわなければならなかつた。この中世の知的体系に

かとう・よしき  
1979年、愛知県生まれ。東京基督教大学助教。宗教哲学、初期近代西歐思想史。米国プリンストン神学大学院博士課程修了(Ph.D)。論文に、「スティーブン・ラムゼーの神の概念—スピノザ哲学と十七世紀ネーテルラントの神学者たち」ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のミクロコスモス』(中央公論新社、近刊)所収。ブログ: "Theologia et Philosophia" (<http://d.hatenablog.jp/yoshiyuki79/>) Twitter: @yoshiyuki79

になり、だんだんと神々の存在は遠いものとなつていった。これは日本だけの特殊な状況ではなく、科学技術が発展したどの社会においてもみられるものである。

しかし同時に、ひとたび現代日本の表層を覆っているものをめくつてみれば、科学的思考に取りきらないものが未だ多くあることもまた事実である。本稿では、この両義性を念頭に置きつつ、現代日本人にとって神とはだれかという問いの考察を深めていきたい。最初に、近代科学が始まつたとする十七世紀の西欧における神をめぐる問い合わせを概観した後、現代日本における科学的合理性を超えた信心と神学的枠組み

戦いを挑んだのが、科学革命であった。教会や聖典とは別の次元で、かつ確実に宇宙を理解する、それが初期近代の思想家たちが求めていたものだつた。それゆえ、数値や数式の問題ではなく、形而上学、認識論、いやそれ以上に、「神はどういうもののか」という神学的問題が、科学者たちの議論の中心にあつたのである。

初期近代の思想家たちの神は、人間の知性と宇宙の合理性を保証してくれる神であった。デカルトの神は、その本質の不变性を通して自然法則を保存する神であつた。スピノザも、理性による認識と宇宙の秩序とを完全に、またパラレルに合致させる神を想定した。宇宙の物理的な運動と静止は数式として理解できるようになり、合理的な世界を理解するのに教会と聖典は不要になる。それゆえデカルトやスピノザの神はある意味で、宇宙に関する知識の確実性を人間の理性にひらくてくれたのである。

デカルトやスピノザの神学によつて、宇宙の知識は確実性を伴うようになり、人間は自然の理解に邁進した。そして、ただ自然を理論的に理解するのではなく、神という手段を用いて自然をコントロールすることが可能となつたのである。神の法則が自然や人間界を治めており、その法則を発見することによって自然を自己の望む通りに変化させ占有していくことが可能になる。このようにして自然科学の発展は、同時に科学技術の発展につながり、やがて中世世界は新しい技術によって作り替えていった。十八世紀や十九世紀に入り、宇宙の法則が理性によつて確

実に把握されるようになるにつれて、いつのまにか神という概念は必要なくなつていった。スピノザが望んだように、合理的な世界はそれ自身が自己原因化 (*causa sui*) するようになり、科学的思考や科学的方法論は自明のものとなつた。その結果、世界の合理性と認識可能性を保証していた神は不要になり、デカルトやスピノザが唱えたような神学としての科学思考は廃れていった。

### 現代日本における神と神々

話を現代日本に戻そう。高度な科学技術が発達した現代日本において、神々の存在が以前より遠くなつたことは事実である。唯物論的無神論を公言している者はそれほど多くないかもしれないが、科学的合理性が広く根ざしたことによつて神仏、宗教、迷信の強い影響下にある人は少くなつたのではないだろうか。しかし上述のように、科学的思考に收まりきらうにには消え去つたわけでもない。では現代日本において、神と神々はどのようななかちで問われるのだろうか。大きくみて二つの見方があるだろう。

一つは、科学的合理性からみ出る信仰や信心である。これは科学的合理性のうちにありながらも、漠然と自然を超える力や存在を認める心理状態を指す。その興味深い一例を映画『はやぶさ/HAYABUSA』(2011) にみるとことができる。小惑星探査機「はやぶさ」の帰還という歴史的な快挙をドラマチックに描いた映画である。そのなかに、JAXA プロジェクトチーム一同が神社でプロジェクト成功を祈願し、

「この例は何を表しているのだろうか。ボーアは科学者として、まじないを信じていないとはつきり明言している。しかし同時に、「信じていなくても努力がある」と信じてもいるのである。これを現代日本の状況に置き換えてみよう。日本人の多くは宗教や超自然的な存在を信じていないという。しかし神棚と仏壇をもち、法事を重んじ、初詣に行き、地鎮祭を欠かさない。もちろんこうした宗教行事を執り行う人たちに尋ねれば、自らの信仰心を認める人は多くないかもしれない。だがひとたび、秩序づけられた伝統や行事を乱すものがあれば、力強く反対するだろう。こうしたことは、新興仏教徒や一部のキリスト者といわゆる一般的な日本人との間での、法事、仏壇、神棚など様々な宗教儀式を巡る軋轢に鮮明に現れている。

意識的には無宗教を表明しているが、無意識の構造、つまり行動と欲望を規制する象徴パターンは、宗教・神学的な構造をもつてゐることである。神々や宗教を信じていな

いと表明することがすなわち、無意識の宗教性を否定することにはならない。逆に、意識・言語化されないので、象徴パターンが行動と欲望に与える影響はより強いものとなるのである。

以上の二つ以外にも、現代日本における神や神々をめぐる問い合わせはあるだろう。現代日本における政治神学を考察することも重要だし、神学的に現代の経済的グローバリズムを理解することも必要である。しかし、本稿では先述の二つの見方によつて、日本人の神学的枠組みを明らかにしようとした。ここではあえて「神学的枠組み」という言葉を用了。理で説明できない要素、そして他者に自明でないものを自己には自明のようにあつかう認識のあり方は、哲学や理念というより神学的と呼ぶべきだと考えるからである。

「神とはだれか」という問い合わせから限りなく遠いところにあるようにみえる現代日本においても、神学的枠組みは存在しており、表面的な無宗教性は逆にこの神学的枠組みを無意識化し、結果としてより強力な枠組みにする。このような現代日本の神学的状況のなかで、どのようにキリスト教の神は意味をなすのだろうか。最後に、現代においてキリスト教の神を語る可能性について考えながら論を閉じたい。

### 現代におけるキリスト教の神

現代においてキリスト教の神を語るにあたって、伝統的な神觀を復興させるという動きがある。先述したように、デカルトやスピノザらが構築した近代科学の神学的枠組みは、あ

研究室に神棚をおくシーンが出てくる。現代最高峰の知性を誇る科学者たちが、前近代的な神々に祈りを捧げるのである。この例は科学と伝統的宗教がそれほど矛盾なく共存する現代日本という場所性をうまく表しているといえよう。

そのため、実践として自己目的化された科学が導入された十九世紀の日本においては、初期近代の思想家たちが中世の神概念を超克したように、神仏、宗教、迷信を徹底的に超克することはなかつた。つまり近代科学を導入するにあたつて西洋社会が直面したような神学論争は必要なかつたのである。実学として導入された科学は、伝統的な神々を駆逐することなく、神々と共に存することを可能にした。この科学と信仰、合理性と伝統的宗教が併存する心理状態はなにも日本に限つたものではない。科学と合理性を神学的に定義づけない現代においては、伝統的なキリスト教信仰をもちつつ最高峰の科学に従事する研究者は欧米においても少なくない。リチャード・ドーキンスなど科学的合理性を神学的に弁証する思想家も存在するが、それは決して多数意見ではない。

もう一つは、無意識のうちの宗教・神学性である。どうい

る意味、伝統的なキリスト教の神観を脱構築したといえる。そしてこの枠組みが十八世紀啓蒙思想の土台となり、西欧社会の世俗化に貢献したのだった。しかし、科学が実践として自立したとき、近代科学の神学的基盤は必要となつた。さらにはまた現代においては、啓蒙思想の合理主義が超克され、「近代化」という大きな物語が喪失したことによつて、前近代的な神学や宗教が世界中で息を吹き返してゐる。世界の宗教の復古的な潮流に乗り、キリスト教も自身の伝統的な神観を語るべきなのだろうか。つまり、近代科学や啓蒙思想を一度清算して、むかしながらの絶対無限なる三位一体の神を語るべきなのだろうか。

このような試みは、キリスト教が伝統宗教として根ざしてゐる歐米では可能であり、現に正統的なキリスト教の復興運動は多様な形式をもつて各地でおきている。しかし日本においては、先述のように近代科学や啓蒙思想が導入されるにあたつて欧米のようなキリスト教を主軸においた神学論争が起らなかつた。となると、科学神学と啓蒙思想の没落によつて復興されるのはキリスト教の神ではなく、伝統的な神道や仏教、あるいはそれらの一派である。そして現にそのような流れはおきてゐるのである。

それではどのようにキリスト教の神は、現代日本において語られるべきなのだろうか。様々な可能性が考えられるが、その一つとして十字架における神の死の表象に注目したい。人間は古代においても、様々な矛盾や苦難のなかに自己の存在をみいだし、現世における苦しみの解消法はない。そこには愛、つまり眞の神がある。天の神の右の座にとどまるのではなく、ゴルゴタの丘での死を選ぶ行為は、至上の愛以外のなにであろうか。この事実をキリストの十字架は認識させてくれる。ひとり偶然と苦しみのなかに立ちすくむのではなく、また、安易な救済を提供する神学的枠組みのなかに身を委ねるのでもない。キリストと共に、またこの事実を認識するものとともに苦しむことが、愛である神を経験することになり、また同時に他者に対して神の愛を表現することになる。現代日本において語られるべきキリスト教の神とは、このようなものではないだろうか。

おわりにかえて

結論としてなにがいえるだろうか。身近でなかつたはずの神に関する問いは、突き詰めていくと、現代日本のおかれた思想的状況と人々が無意識的に内包する神学的枠組みを明らかにすることになつた。また、この日本の状況を超えていき、苦しむものとともに苦しむ本当の愛を認識させる神のすがたに触れることもできた。もちろん筆者の試みは不十分なものであるし、この議論は思想史的、宗教哲学的、神学的によりいつそう深められなくてはならない。しかしさらなる議論のきっかけや一助となることができれば、本稿の目的は果たされたといつてよい。

2011年、「震災とキリスト教ジャーナリズム」に続く公開パネルディスカッション

# 3年目の問い合わせ 震災・原発・福島から見るキリスト教

改めて  
いま、「震災と宗教」を問う

この3月に震災・原発事故から3年目を迎える東北——。福島から被災当事者を招き、メディアに携わるパネリストを交えて、教会内外から改めてキリスト教を含む宗教界の支援のあり方やそれを巡る報道がどのように行われ、一般社会からどう受け止められてきたかなどを問う。

■日時 2014年2月21日(金) 18:00~20:00

■場所 日本基督教団A・B会議室(新宿区西早稲田2-3-18 早稲田駅下車徒歩5分)

■パネリスト

- 柳沼千賀子氏(福島やさい畑~復興プロジェクト理事長)
- 北村敏泰氏(中外日報特別編集委員)
- 島薗進氏(宗教学者・上智大学クリーフケア研究所所長)
- 西出勇志氏(共同通信編集委員)

■主催 キリスト教出版販売協会出版部会

■問合せ 048-424-2067(キリスト新聞社)

参加費無料・事前予約不要

として神や仏を想定してきた。自己の苦しみをいつかは解消してくれる存在として、自分以上の存在者にすがるのである。上述のように、現代日本においても科学的合理性を超えた信心は人間の能力の不足を補うものであつたし、無意識に構成された神学的枠組みも同様に人間の苦しみに対してもなんらかの解決を用意するものであつた。

しかし、苦しみから人間を救い出す神学的枠組みのかわりに、キリスト教は、全能の神を十字架の上で殺す。そこにあらわれるのは、弱々しく、苦しみに満ちたイエスの姿のみである。神である御子が十字架上で、「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ」、すなわち「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てにならましたか」と語ることにおいて、全能なる神の弱さがあらわされている。この傷だらけの神の姿は、彼岸において人類を救済するはずであつた神の死をあらわしているのである。

この傷だらけの不能な神の死は、人間の生の根本的な矛盾を公表する。つまり、いまここにある苦しみから人間を解放する方法は、彼岸や超越性のうちにはないということである。どのような宗教も、合理性を超えた信心も、無意識的に行動と欲望を組織立てる伝統的な慣習も、金も権力でさえも、それを成し遂げることは不可能である。いうなれば、十字架上の神の死は、日本人の神学的枠組みの不能性を声高々に語るのである。

では、人間はただ苦しみ続けるのだろうか。そうではない。キリストの死は、人間を絶望のうちに置き去りにするもので